

令和2年度（第64回）

岩手県教育研究発表会資料

いきる・かかわる・そなえる分科会

「いわての復興スクール〈内陸〉」

中高等部を中心とした、本校防災学習の実践

令和3年2月10日

岩手県立前沢明峰支援学校

伊藤 明彦

【はじめに】

本校が設置されている奥州市前沢地域は、中央部を北上川が流れ、東西を奥羽山脈と北上高地に挟まれている。本校周辺を俯瞰すると、本校敷地の東側には段丘が位置し、北側には北上川に注ぐ支流が流れている。そのため、地震や火災（地震によるものも含む）のみならず、豪雨等による河川氾濫や崖崩れ等が懸念される。

今年度、文部科学省委託事業「学校安全総合支援事業」の「いわての復興教育スクール（内陸型）」の指定を受け、連携校（奥州市立前沢小学校、同前沢中学校、岩手県立前沢高等学校）に協力いただき、年間を通じて事業に取り組んだ。主に、高等部生徒を中心に年間を通じて防災学習を設定し、総合的に防災及び復興教育について学ぶ機会を設けた。

また、全校で実施する避難訓練の中でも、場面に応じた適切な避難行動をとる訓練やAED体験、防災食の喫食等、より実地的な内容を実施した。加えて、中学部生徒は修学旅行（3学年）の学習を通じて復興教育に取り組んだ。

岩手県立前沢明峰支援学校は、知的障がいや肢体不自由を始めとする特別な支援が必要な児童生徒が学ぶ特別支援学校である。「児童生徒一人ひとりが個性と能力を発揮し、可能性を最大限に高め、自立的・主体的な生活を送る。」を学校教育目標に、全校児童生徒 133 名（小学部 31 名、中学部 34 名、高等部 68 名）が学んでいる。

1 事業について

今年度、文部科学省委託事業「学校安全総合支援事業」の「いわての復興教育スクール（内陸型）」の指定を受け、連携校と協力し防災教育及び地域防災のための情報共有に取り組んだ。

2 事業の目標

（1）本校の状況

本校は特別支援学校であり、知的障がいを始めとする特別な支援が必要な児童生徒が在籍している。年間5回、児童生徒の実態に合わせた避難訓練を実施しているが、近年頻発している洪水や河川氾濫への対応、総合的に防災を学ぶ機会については十分に行えていない状態である。

（2）事業の目標

いわての復興教育プログラムに基づき、「いきる」「かかわる」「そなえる」の3つの教育的価値を本事業と関連させ、地域の人材を生かした具体的な体験学習や関連施設の見学、成果のまとめ学習等をおし、「児童生徒一人一人が、災害時対応訓練で身につけた力を生かせる」ことを目標とする。

また、関係機関や連携校（前沢小中高等学校）と協同し、防災に係る研修や各校での情報共有を基に、地域の特性に応じた持続的で発展的な防災に係る取組体制を構築する。

3 今年度の事業内容

実施時期	学校の取組	関係する学校等との連携内容
4月下旬		・事業説明（各連携校）
7月13日 22日 30日	<ul style="list-style-type: none"> ・防災学習オリエンテーション ・奥州市防災士会による防災学習①「水害」 【学校防災アドバイザー派遣事業】 ※連携校教員への公開 ・地域防災研修会 【学校防災アドバイザー派遣事業】 	<ul style="list-style-type: none"> ・奥州市防災士会「絆の会」による生徒向け講習 ・連携校教員の参観、意見交換 ・校内研修会への、前沢小中高教員の参加、情報共有
9月7日 16日 29日～ 10月1日	<ul style="list-style-type: none"> ・震災に係る施設見学「東日本大震災津波伝承館」見学 ・地域合同避難訓練（AED体験・シェイクアウト訓練・非常食喫食等） 【非常食：調理不要カレーライス】 ※連携校教員への公開 ・中学部3年生修学旅行「東日本大震災を知り、復興と沿岸を知る修学旅行」 	<ul style="list-style-type: none"> ・東日本大震災津波伝承館 ※職員による説明 ・前沢行政区住民の参加 ・近隣福祉施設職員の参加 ・参加住民、施設職員との意見交換 ・連携校教員の参観、意見交換 ・沿岸部施設（三陸鉄道、かもめテラス、ホテル羅賀荘、もぐらんぴあ他）
10月2日	・避難訓練等見学（前沢中学校）	・本校教員の見学と情報交換
11月9日 11月中	<ul style="list-style-type: none"> ・奥州市防災士会による防災学習②「火災」 【学校防災アドバイザー派遣事業】 ※連携校教員への公開 ・防災学習「学校周辺の危険箇所と避難場所確認」 	<ul style="list-style-type: none"> ・奥州市防災士会「絆の会」による生徒向け講習 ・連携校教職員の参観と意見交換
12月21日	<ul style="list-style-type: none"> ・奥州市防災士会による防災学習③「地震」 【学校防災アドバイザー派遣事業】 ※連携校教員への公開 	<ul style="list-style-type: none"> ・奥州市防災士会「絆の会」による生徒向け講習 ・連携校教職員の参観と意見交換
1月下旬	・生徒によるまとめと校内発表、掲示 ※まとめポスター作成（予定）	
2月下旬	・交流学习（前沢高等学校）で発表 ※今年度はポスター交流（予定）	・連携高等学校の生徒及び教員の参加

4 事業実践

【取り組みにあたって】

本校の児童生徒については実態が多岐に渡るため、校内での学習集団を「新規に防災学習を設定し実践するグループ」「避難訓練を中心に、昨年までの内容を継続して実践するグループ」の2つとした。前者グループとして、「高等部の進路学習（※学校設定教科）から選抜したグループ（1～3年生33名）」及び「中学部3年生（12名）」とした。

（1）高等部生徒（進路学習選抜グループ）による防災学習

本グループでの取組を行う前に、防災についての「意識」や「知識」、「それぞれの抱えている疑問点や不安点」等を明らかにするために、参加生徒全員に事前アンケートを実施した。その結果や傾向について、授業者や講師と情報共有し、年間の実践を行った。

また、学習の第一時間目にオリエンテーションを行い、「年間の学習計画と内容」を包括的に提示した。

ア 奥州市防災士会「絆の会」による防災学習【全3回：7・11・12月】

地域の防災士会に協力いただき、総合的に防災を学ぶ機会を設定した。全3回それぞれで「水害」「火災」「地震」のテーマを設定し、テーマに沿った災害の仕組み理解や具体的な避難方法、実技を中心とした体験型学習を行った。また講師が元東京消防庁職員（ハイパーレスキュー）だったこともあり、生徒は講師の災害救助等の経験も含めて聴講できた。なお、3回の本学習については学校防災アドバイザー派遣事業として実施した。

【目的】 防災について総合的に学ぶ

【講師】 千葉 稔 氏（奥州市防災士会「絆の会」会長）

「第1回：水害」

【内容】

- ・水害の危険性（ラジオやテレビの防災気象警報を聴くこと、普段からの危険な場所の把握等）
- ・具体的な避難方法（夜の避難の危険性、避難に適した履物等）
- ・防災に係る実技講習（段ボールベッド体験・新聞スリッパの作成）



防災学習の様子1



具体物を提示した学習



段ボールベッド体験



演習：身近な物の活用 1
(新聞紙スリッパ作り)

「第2回：火災」

【内容】

- ・火災の危険性（煙の危険性、炎のスピード等）
- ・具体的な火災対応（大声で知らせること、濡らした毛布をかぶること等）
- ・具体的な避難方法（姿勢を低くすること、ビニール袋を使った避難等）
- ・防災に係る実技講習（ビニール袋ポンチョの製作・買い袋を活用した三角巾）



火災時に低い姿勢で移動する練習



演習：身近な物の活用 2
(ビニール袋で暖をとる)



演習：身近な物の活用 3
(ビニール袋で暖をとる)



演習：身近な物の活用 3
(コンビニ袋で三角巾を作る体験)

「第3回：地震」

- ・地震発生の原因
- ・事前の備え（非常用品の備え、スリッパやスニーカーの準備等）
- ・地震後の行動（「身の安全を優先した行動」、外に飛び出すことの危険性、情報収集の大切さ等）
- ・自分が建物の下敷きになったとき
- ・防災に係る実技講習（サランラップを活用した止血・応急処置、毛布やシーツを使った搬送）



防災学習の様子2



背負って搬送する手本を提示



演習：身近な物の活用4
(サランラップと雑誌で患部を固定する)



演習：毛布を使って搬送する

※生徒へのアンケート結果は別紙参照

イ 震災に係る施設見学【9月7日】

【目的】

- ・本県沿岸部の震災関連施設の見学と災害体験聴講等をとおして、東日本大震災の被害と現在の復興の様子について知る。
- ・県内で起こった災害の様子を知ることにより、防災を身近なこととして考える契機とする。

【見学場所】

東日本大震災津波伝承館（岩手県陸前高田市）

【内容】

館内展示やガイダンスシアター等の見学（解説員による解説）、奇跡の一本松見学

【学習の様子】

参加生徒は、震災発生時には小学校低学年であり、断片的な地震の体験記憶やニュース映像等での記憶がほとんどである。総合的に東日本大震災の様子と復興への道のりを俯瞰できる機会となった。

津波に押し流されて形が変わってしまった消防車や、繰り返し押し寄せる津波の映像、その中での人々の取組の様子等、生徒全員が真剣な表情で参加し、事実を知ることができた。自分の立場に置き換えたり、教訓を新しい知見として感想に記述できたりした生徒もいた。

※生徒へのアンケート結果は別紙参照



伝承館での展示や映像で、
事実と復興の過程を知る



展示物見学を通して被害を学ぶ



「奇跡の一本松」を見学

ウ 校舎周辺のハザードマップ読み取りと、避難路の確認【11月】

防災学習グループのうち、一部の学年で「学校周辺の危険箇所と避難場所確認」を実施した。

【実施学年】 2 学年（進路学習選抜グループ）

【内容】 ハザードマップを用いた、学校周辺地域の危険箇所確認及び避難所確認

【学習の様子】

ハザードマップを基に、学校周辺の危険箇所について実際に場所や方向を確認した。大規模河川（北上川）の方向や校舎東側の段丘を確認したことで、洪水が来る方向や崖崩れが予測される危険な場所等について、目視し指さすことができた。

また、本校北側を流れる小規模河川（過去に氾濫したことがある）についても実際に確認した。現在の様子からは想像しにくいようであったが、ここ数年起きている想定外の雨量や洪水をニュース等で見聞きしている生徒は、真剣な表情で話を聞いていた。

エ 防災学習の成果発表

今回の防災学習については、参加グループを6班に分けて学習を進めた。年間を通じて行った防災学習のまとめとして、グループごとにポスターにまとめる予定である。まとめたものは校舎内に掲示した他、前沢高等学校との交流として、高校校舎内にポスター掲示を計画している。

(2) 避難訓練での取り組み

ア 地域合同避難訓練【9月16日】

年間5回実施されている本校避難訓練のうち第4回目の訓練である。本校が設置されている行政区及び行政区長、近隣の福祉型障害児入所施設、障がい者施設に呼びかけて行った。全校児童生徒が参加した。

1) 避難訓練

第3回までの「災害発生時での基本的な動き方の確認」に重点を置いた訓練を経て、今回は「参加職員が『(本校)安全確保指導体制』を基本に、状況に応じて安全確保・避難する（実施計画上での動き方の記載なし）訓練を実施した。



避難後の集合



シェイクアウト訓練の様子

2) AED使用体験

【対象】 高等部進路学習選抜グループ

【内容】

実物やプリント、スライドを使用しながら、「AEDとは」「電気ショックまでの時間と生存率」等を学習した。その後、グループに分かれ「電話での連絡方法」「AEDの使用」を体験的に学習した。

また、グループ別に校内2カ所のAED設置場所を直接確認した（本校はスクールバスも含め全3カ所設置されている）。

【学習の様子】

生徒のこれまでの使用経験については様々であった。操作を思い出したり職員と確かめたりしながら全員が数回ずつ体験できた。女子を中心に「機器操作に苦手さ」を示す生徒もいたが、繰り返す中で慣れることができた。

※生徒へのアンケート結果は別紙参照



AED使用体験



離れるように声を出して呼びかける

3) 防災学習及び避難用スロープ体験

対象：小中学部児童生徒

4) シェイクアウト訓練

対象：高等部生徒

学年ごと校内3カ所に分かれ、その時にいる場所での「安全確保」「避難」について体験的に学習した。

5) 防災食喫食

【対象】 全校児童生徒

【喫食】 ザ・カレーライス（〈株〉非常食研究所）

【特徴】 食物アレルギー特定原材料 27 品目不使用

水、熱、調理不要

スプーンで混ぜることで、介護食（刻み食・流動食）離乳食が作成可能

【喫食の様子】

一部米飯の袋が開けにくかった生徒がいたようだが、教師が手伝ったこともあり概ね準備し食べることができた。咀嚼や嚥下に課題がある重複障害学級児童生徒についても、混ぜることで実態に合った「食べやすさ」とすることができた。

【教員の感想から】

特別食を食べている生徒が学級にいたので、形状が心配だったが、問題なく食べることができました。普通食の子も安心して食べることができる保存食はありがたいと思いました。

※生徒へのアンケート結果は別紙参照



今回喫食した防災食



防災食喫食の様子

6) 地域の方との情報共有

事後に、参加施設の代表や行政区長を交え、「地域の課題」を共有した。

(3) 「修学旅行（中学部3年）」での取り組み

【目的】

三陸沿岸の修学旅行を通して、「いきる・かかわる・そなえる」を学ぶ。

【行程選定の主旨】

新型コロナウイルス感染症の影響で旅行先を（従来の東京方面から）岩手県の三陸沿岸方面に変更した。自分たちが住む岩手県の魅力を再確認し、被災地である三陸沿岸を訪れ、実際に見て、聞いて、味わい、感じて、体験することによって「いきる・かかわる・そなえる」を学ぶことにつながると考えた。

また、震災学習として、三陸鉄道の震災復興教育貸切列車「盛駅～釜石駅」「田野畑駅～久慈駅」の2区間を乗車する計画を立てた。三陸鉄道に乗車し、三陸沿岸を縦断することを今回の修学旅行の軸として考え、車窓から見える景色や駅長さんの講話を通し、災害などの困難な状況でも自主性を持って力強く生き抜く子どもたちの育成につなげたいと考えた。



三陸駅で黙祷する



かもめテラスで説明を読む

【見学・体験先】

・かもめテラス（大船渡市）

大船渡市のさいとう製菓が手掛けるかもめテラス。生徒一人ひとりが自分の手で「かもめの玉子」を作れるデコ体験を行った。店内には、2011年の東日本大震災でさいとう製菓の店が被災した様子が写真で飾られてあり、生徒が足を止めて説明を読んでいた。

・漁業体験（山田町）

漁業体験では、地元の漁師さんから「震災の様子」や「復興のあゆみ」などを聞いた後、漁業体験を行った。体験では、海から収穫したカキやホタテ貝を刃物できれいにする作業を行った。

<事前学習>

初めに、自分が住んでいる岩手県について地図を使い学習した。自分たちの学校がどこにあるのか、修学旅行で行く場所はどこにあるかを確認した。次に修学旅行で行く三陸沿岸地域が2011年3月11日に地震による津波の被害にあったことを映像ではなく、当時の岩手の新聞を使って教師の説明を聞いた（生徒たちの修学旅行に対する「楽しみ」や「期待感」が「怖さ」や「不安」に変容してしまう可能性を考え、映像や動画を使わず新聞の情報に留めることを共有した）。地震による津波の被害や影響は生徒たちも何となくは知っていた様子だったが、今回の事前学習によって事実の理解を行うことができた。

そして、現在、三陸沿岸地域がどのような状況でどのように復興が進んでいるか、という視点に移行しながら学習を進めた。最後に修学旅行に向けて、自分たちができることは何かを考える時間を設定した。隣席やグループで話し合い「今、自分たちにできること」を3つにまとめた。

【今、自分たちにできること】

- 1 宿泊場所・見学場所の避難経路、避難場所の確認。
- 2 これからの避難訓練への取り組み方（意識を変える）。
- 3 命を守る行動を心がける（考える）。



<見学・宿泊場所>

○見学場所や宿泊場所等での避難経路や避難場所の確認。



<事後学習>

修学旅行での取り組みの振り返りに合わせて、これからの避難訓練への取り組み方を全員で確認した。生徒からは「動かない」「低い体勢をとる」「頭を守る」という発言があり、すぐに命を守る行動をとる大切さを学年全体で確認することができた。

〈担当の感想〉

今回の修学旅行を通して生徒の防災意識を高めることができた。災害や困難なことに直面した際に、常に「自分たちができること」を考え行動できるように、今後も「いきる・かかわる・そなえる」を意識した学習を展開していきたい

(4) 職員研修会を通じた取り組み（連携校との取り組み）

学校防災アドバイザー事業により、以下の内容で研修を実施した。研修には地域の連携校である前沢小中学校、高等学校の防災担当者を招き、奥州前沢地区のハザードマップの読み取り方や想定される災害リスク、豪雨・洪水を主とした対応の基本的な考え方等を学んだ。研修終了後は、本校及び連携校担当で「想定される地域の災害リスク」について情報共有した。講師からは「情報収集（事前に情報を集める）」「危機予測」を基本とした「状況判断（適切に判断する）」の重要性について助言いただいた。

【講演テーマ】危機への対応

【目的】

- ・洪水を主とした各種の災害時に、本校近隣で発生する災害リスクについて知る。
- ・ハザードマップから読み取る災害リスクについて知る。

【講師】越野 修三氏（岩手大学地域防災研究センター客員教授）

【参加者】本校職員、連携校（小中高3校担当者）

【内容】

危機の定義、豪雨・土砂災害について、（豪雨や洪水を主とした）各種の災害時に本校周辺で想定される災害リスク、状況判断の思考過程と対策（演習）等

〈終了後〉

連携校担当者との情報交換（避難方法や場所の確認と共有、地域で想定される災害リスクが起こりうる具体的地点の確認と共有）、講師助言

※学校防災アドバイザー派遣事業として実施した。



防災研修会



連携校との情報交換・共有

(5) 連携校の防災に係る行事見学

本校教員が連携校（前沢中学校）へ伺い、避難訓練の様子を参観し情報・意見交換した。

・避難訓練の参観【10月2日】

連携中学校での避難訓練を参観した。昼休み時間に、「生徒予告なし」で避難訓練を行うことの意義、事後学習プリントの活用法等を情報交換した。

5 成果と課題

(1) 成果

本校で実施されている避難訓練を基本に、近年の災害状況に合わせた対応や防ぐ取り組み（防災）、東日本大震災と復興について総合的に学習する機会を設定した。また、中学部3年生については、復興教育に主眼を置いた修学旅行を実施した。

本事業の成果について3点、以下に記載する。

ア 防災学習での取り組みについて

本校生徒の実態の多様さや習熟度等から、防災学習に取り組むグループを特設した。各学習後のアンケートについては別紙資料に掲載しているが、尺度評価からも生徒の興味や関心に沿ったものであったことが伺える。

特別な支援が必要な生徒の防災スキルについては、従来「訓練の中で繰り返し身に付ける」内容が主流であった。その中で「助けられる側」「守られる側」の側面が比較的強かったように考える。奇しくも本事業内での防災学習で「水害」「火災」「地震」を担当した千葉稔氏（奥州市防災士会「絆の会」代表）が「自分の命は自分で守る」といった内容を繰り返し強調された。今回、「水害」「火災」「地震」の体験的な学習や「震災の事実を知り、復興の様子を自分の目で見て確かめる」学習、AEDの使用体験等を通して、（災害等の対応について）生徒のアンケートからも積極的な感想や意見が出ている。「自分の命は自分で守る」ために「いきる」「かかわる」「そなえる」力が育ち、「進んで行動する側」へ、生徒の意識と行動が変容していくことを願いたい。

イ 地域連携について

今年度、職員研修会を通じた取組（事業の取組の中で記載）では、連携校担当者に参加いただき地域全体で想定される災害リスクや避難場所、具体的に注意が必要な地点等について確認・共有できた。これまでそれぞれの学校で抱えていた課題や想定していた避難経路等が確認・共有できたことは大きい。

それぞれの学校がそれぞれの年間計画で動いているために、どうしても一堂に会することに難しさがあることは否めないが、今回の情報共有と、それを経て講師から地域防災への示唆をいただいたことは大きな成果であった。

ウ 中学部での実践について

従来計画していた東京方面への修学旅行が実施できなくなったため、本県沿岸部を主体とし復興教育に主眼を置いた修学旅行を実施した。生活経験や社会経験が必ずしも多いとは言えない本校の生徒たちにとって、実際に「見ること」「手がけること・体験すること」の意義は大きい。これまでなんとなく見たり聞いたりすることで感じていた「東日本大震災」や「現在の沿岸の様子」について、体験を通して学ぶことができた。さらには「今、自分たちができること」について考えることができた。本学習を経て、「自分が生活している地域（や郷土）を知る」視点や一人ひとりの防災意識が、体験を通して深まり広がった機会となった。

(2) 課題

今年度「いわての復興教育スクール〈内陸型〉」の指定を受け実施した中で、多くの成果が得られたが、実施上または継続上の課題点も明らかになった。

本事業の課題について3点、以下に記載する。

ア 本校で学んでいる特別な支援が必要な児童生徒については、「学んだことの定着の難しさ」や「場面が変わると、身に付けた力が発揮しにくくなる困難さ（般化の困難さ）」をもつ生徒も多い。本事業での学びが、家庭場面で、または今後実際に起きる災害場面で具体的に発揮できるために、どのような取り組みが必要かが課題となる。

イ 本実践については、高等部を主対象とし防災学習を実施するグループを特設し実施したが、それ以外の集団（避難訓練を中心に、従来の学習を継続して学習したグループ）の学びについて、成果と課題の検討が必要である。

また、本校は小中高一貫校であることから、防災についての学習が継続的に積み重なっているかの検証も重要である。学校安全計画の見直しの際は、上記の視点も盛り込む必要がある。

ウ 今年度事業を行う中で、多くの講師からの講義や見学の機会等をいただき、成果を上げることができた。事業の内容を次年度以降の本校の教育課程に盛り込んでいくために、取り入れる内容についての検討が必要とされる。継続的、持続的な内容としていくために、どのように取捨選択していくか、またどのように発展的な内容を設定していくかが課題となる。

6 おわりに

コロナウイルス感染症対策を処しながらの事業であったため、講師の先生方を始め、校内及び連携校の先生方には多くの協力をいただいた。本事業に関わっていただいた全ての皆様に、この場を借りてお礼を申し上げたい。

【別紙資料：防災に係る各学習後に、生徒へ行ったアンケート集計結果】

各防災学習や避難訓練等の行事後に、参加した高等部進路学習選抜グループ生徒全員（33名）へ学習の評価と自由記述を含むアンケートを実施した（評価のために設定した尺度は以下のとおりである）。

また、自由記述項目については、「大切だと思った内容」や「感想」、「疑問点」「その他」を設定した。生徒が記述した特筆すべき内容についても以下に記載する。

【防災学習事後アンケートに係る4尺度】

- A（肯定：うまくできた・よかった等）
- B（やや肯定：まあまあうまくできた・まあまあよかった等）
- C（やや否定：あまりできなかった・あまりよくなかった）
- D（否定：できなかった、よくなかった）

※4項目に設定した理由：「どちらでもない」といったあいまいな評価をなくするため

【防災学習】

項目/尺度	A	B	C	D	欠席等
水害	25	2	2	0	4/33名
火災	23	4	1	0	5/33名
地震	22	2	1	0	8/33名
本学習を 通して	23	2	0	0	8/33名

[特筆すべき生徒の感想]

〈水害〉

- ・自分の命は自分で守ること。
- ・浸水した道路を歩くときは、運動靴がよい。
- ・NHKのデータ放送での天気予報を、これからも見ていきたい。
- ・段ボールが意外に使えることが分かった。

〈火災〉

- ・火事で亡くなった人のほとんどが煙が原因ということを知りました。
- ・姿勢を低くして避難することが大事だと思った。階段の角に空気があることを知った。
- ・声が出ないときは、鍋のような音が出る物をガンガン叩いて近くの人に危険を知らせること。
- ・ビニール袋が骨折したときの包帯（三角巾）代わりみたいなものになることが分かりよかった。ゴミ袋が寒くなったときの服代わりになることが分かった。

〈地震〉

- ・地震は海でおきるものと陸でおきるものがあることを知りました。
- ・こっせつした時に必要なものがない場合は、ざっし、ラップなどを使用してきんきゅう手当をする事を覚えました。
- ・けがをした人を運ぶ方法を覚えました。
- ・地震から火事が多いことを初めて知りました。
- ・「たすけられるがわからたすけるがわへ」とゆうことばがぐっときました。
- ・自分でも出来ることがあるんだなと思いました。

【震災に係る施設見学「東日本津波伝承館見学」】

項目/尺度	A	B	C	D	欠席等
見学について	24	5	1	0	3/33名

[特筆すべき生徒の感想]

- ・三陸は、以前にも津波があったことを初めて知りました。
- ・決して自分だけが大丈夫と思わないことが大事だと知りました。
- ・つなみがきたら、たかだいににげるのをまなびました。
- ・「つなみてんでんこ」ということを学びました。
- ・じっさいにきたら、ふるえているじぶんをそうぞうしました。
- ・自分の命は自分で守ること（の大切さ）を覚えた。

【地域合同避難訓練（第4回避難訓練）】

項目/尺度	A	B	C	D	欠席等
避難訓練	20	11	1	0	1/33名
AED体験	16	13	3	0	1/33名
非常食体験	14	12	2	4	1/33名

[特筆すべき生徒の感想]

〈避難訓練〉

- ・おちついて机にふせて、あわてずひなんできた。
- ・素早く行動できました。
- ・先生の指示に従い安全に避難をしました。
- ・いろいろなことがおこることをそうていしてうごきたい。

〈AED体験〉

- ・パッドをはるいちがわかりました。
- ・難しかったですが、やるにつれて手順を覚え、体験することができました。
- ・少しでも早く使うことで命をすくうことができることが分かった。

- ・人生で初めて使った。学校だけでなく、いろんな場所にあるってことを知った。
- ・じしんがなくてもつかわなきゃいけないということが大事だと思いました。
- ・AEDは（校内に）3つ設置し（ていることが分かった）。初めて使用した。

〈非常食体験〉

- ・どんなものなのかをすることができて良かったです。
- ・非常のときはつらいごはんでした。
- ・ごはんはあんまりだった。
- ・非常食はまずいイメージがあるが、おいしく食べられた。
- ・特別食を食べている生徒が学級にいたので、形状が心配だったが、問題なく食べることができました。普通食の子も安心して食べることができる保存食はありがたいと思いました（教員の感想）。